



一身二生

徳川吉宗は第八代将軍であり、“徳川中興の祖”として知られる。幕藩財政の立て直しのため享保の改革に取り組み、その柱の一つが武蔵野新田開発である。大岡越前守忠相や川崎平右衛門の活躍によって見事に新田開発を成功させている▼その吉宗が果たせずに遺言として後世に託したのが暦と地図の作成だという。「暦は、民が日々の暮らしを正しく送る道標だ。それ故、為政者たる者は、星をよく見て天の声を聴き、狂いなき暦を民に与えなければならぬ。また、正しき地図は、国を治め、守る基となるもの。諸外国が頻繁に近海を脅かす昨今、旧来の国絵図を超える日本総図を持たねば、国を治め、守ること難し」と、寛政の改革を推し進めた老中首座・松平越中守定信は語る(太田俊明著『一身二生』)▼この地図作成を担ったのが伊能忠敬である。忠敬は九十九里の網元の三男で、佐原村のかつては豪農であり商家でもある伊能家の婿に入る。暦学が好きで暦学者として名を刻むことを夢としながらも、伊能家の再興のために暦学の勉強を封印し、ひたすら家業に励む。そしてやつと五十一で隠居をして江戸に上り、天下一の暦学者・高橋至時(よしとき)の弟子となる。至時は暦の見直し・作成にあたったが、正確な暦作成のためには地球の大きさを知る必要があつた。このため忠敬は高齢にかかわらず、かつ私財を投げうって測量を重ね、これを機に地図作成に取り組み、日本全図の完成に導いた▼筆者も間もなく齢が大台を更新するが、この機に「一身二生」に出会つたもので、大事にしたい言葉だ。

(土着菌)